

自然科学のとびら

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

Vol. 29, No. 2 神奈川県立生命の星・地球博物館 Jun. 2023



カエントケ

Trichoderma cornu-damae (Pat.)
Z.X. Zhu & W.Y. Zhuang

KPM-NC 29465

神奈川県小田原市入生田

2022年7月20日 折原貴道 撮影

おりはら たかみち
折原 貴道 (学芸員)

その名の通り、林床からまるで炎が立ち上るような姿と色合いのきのこです。本種は元来、神奈川県周辺ではやや稀でしたが、ここ数年、ナラ枯れ*と呼ばれる樹病の拡大にともない、各地で頻繁に発生が確認されるようになりました。この写真のきのこも、ナラ枯れによって枯死したスダジイの樹下から発生したものです。しかし、なぜナラ枯れが広がるとカエントケが多く発生するのか、その詳しいメカニズムは判っていません。

見た目に違わず、本種はきのこ類の中でも有数の猛毒をもち、ほんの少し口に

ただけでも致命的です。皮膚浸透性のある毒成分が含まれることでも有名ですが、実際には素手で少し触れる程度で中毒することはありません。その点は他の毒きのこと同様です。また、カエントケが発生すること自体は、環境へ特に悪影響を及ぼしません。過度に警戒しすぎず、科学的知識をもって「正しく恐れる」ことが重要です。

*ナラ枯れ: カシノナガキクイムシという甲虫が媒介する、ナラ菌と呼ばれる菌類がブナ科樹木(ドングリの生る木の仲間)の内部に侵入し、感染木が急激に枯死する病害。

身近なトリに目を向けて！

かとう
加藤 ゆき(学芸員)

はじめに

砂漠や極地といったごく一部の環境を除き、様々な地域で見ることができるトリは、ヒトにとって身近な生き物といえます。この原稿をまとめるにあたり、知人に「あなたにとっての身近なトリは？」と聞いたところ、カワラバト(図1A)とカラスと即答した人もいれば、少し考えてからメジロと答えた人もいました。このほかにセグロセキレイ、ヒヨドリ(図1B)、アオサギ(図1C)、シジュウカラ、カワウ、メジロなどが挙げられました。なかには、子どもの頃はオナガだったけれど大人になってからはムクドリ、と具体的に答えた人もいました。

一年を通して見られる種が多く、身近なトリは人それぞれだと思いました。一方で、人家周辺で見られるスズメ(図1D)やツバメ(図1E)、様々な環境に生息するカラス、駅や公園などで見かける機会の多いカワラバトは、ごく少数意見でした。

トリは地域や環境、季節によって見られる種類は異なります。特に日本は南北に長く、また標高差もあることから、住環境や活動範囲によって生息している種類は様々です。さらには、トリに対する興味や関わり方によっても身近だと感じる鳥は大きく異なってくるでしょう。ここでは、

ヒトが暮らす環境に生息しているにもかかわらず、身近だと認識されていないトリの現状を紹介します。

スズメは身近ではない？

スズメは小笠原群島を除く北海道から南西諸島にかけて、主に留鳥として分布します。農耕地や市街地、住宅地などヒトが居住する近くに生息し、樹洞のほか人家の軒や瓦の間、電信柱や信号機の腕金や巣箱などを利用して繁殖し、冬になると雑木林や竹林、駅前の街路樹に集団でねぐらを作ります。日本野鳥の会神奈川支部がまとめた『神奈川の鳥2011-2015』(以下、目録と表記)によると、県内にも留鳥として広く分布しますが、県西部の山地では、人家や観光施設が集まっている地域を除き、森林環境での観察事例はほとんどありません。このように主に街中に生息している本種は、ヒトとともにくらしているといっても過言ではないでしょう。

それでは、なぜ身近な種として挙げられなかったのでしょうか。一つは生活サイクルによるものではないかと考えられます。本種は長い間、長距離の移動をせずにはほぼ同じ地域でくらしていると考えられていました。しかし、標識調査に

より、100 km以上もの渡りをする個体がいることが明らかとなりました。また、春から夏にかけての繁殖期には、番に分かれて人家周辺で行動し、冬季は群れを作り、まとまった数がねぐらや農耕地等で見られます。つまり、季節によって生息環境や観察される個体数が異なるため、観察機会が変動するのです。

もう一つは、生息個体数の減少によるものではないかと考えられます。植田・植村(2021)によると、過去3回にわたり全国で実施した鳥類繁殖分布調査において、ほぼ同じ経路で調査できた1,947地点の結果を集計、年代別に比較すると、1990年代と2010年代とでは総個体数(調査経路で確認した個体数の総計)が1万羽以上減少した、とありました。全国的な分布状況はほとんど変わっていないことから、全体的に生息個体数が減少したと思われます。

本県での具体的な生息数のデータはありませんが、近ごろ見かけなくなったね、という声をよく聞きます。スズメというどこにでもいる鳥というイメージが強かったのですが、もしかしたら近い将来、本種の保護に取り組まなければならない日が来るかもしれません。

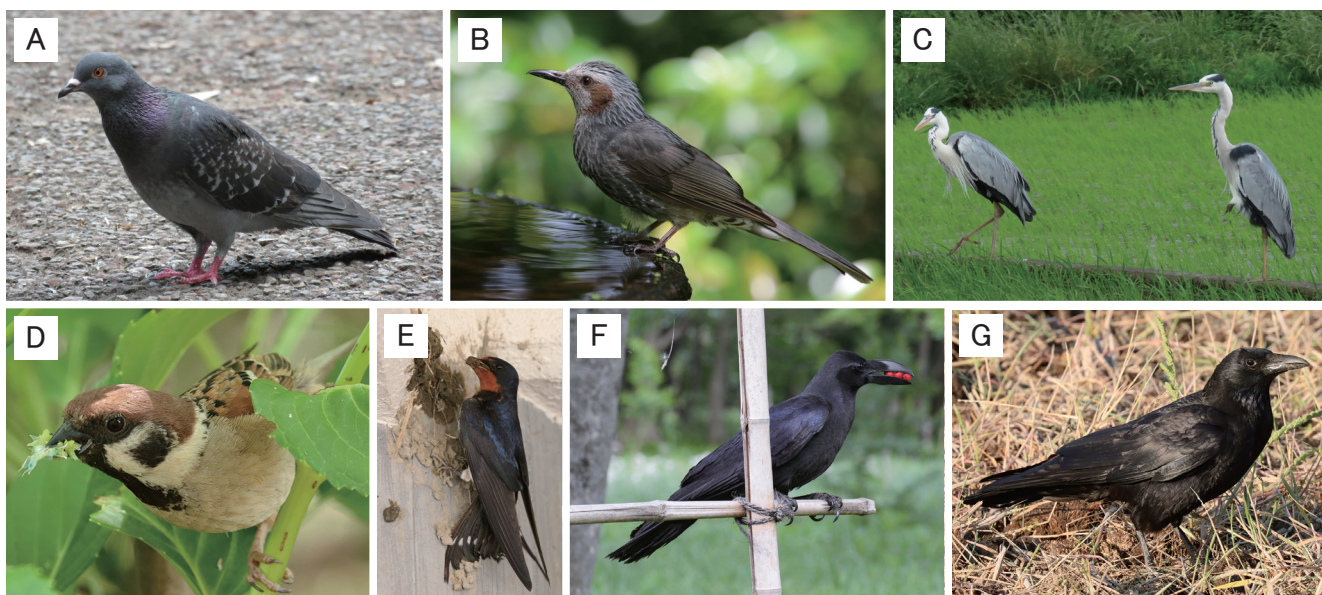


図1. ヒトの身近な環境にくらす代表的なトリ。A: カワラバト, B: ヒヨドリ, C: アオサギ, D: スズメ, E: ツバメ, F: ハシブトガラス, G: ハシボソガラス。A・C・E: 加藤ゆき, B・D・G: 重永明生, F: 田中徳久撮影。

減りつつあるツバメ

ツバメは北海道から奄美大島にかけて夏鳥として渡来し、九州南部などの暖かい地方では越冬します。平地から山地にかけての農耕地や市街地、河川敷で見られ、家の軒先や、北海道では牛舎きゅうしゃや厩舎で営巣をします。

本種もスズメと同様、ヒトとともにくらししているトリですが、なぜか身近な鳥としては挙げられませんでした。多くの地域で夏鳥として渡来するため、季節によっては見られないことに加え、生息数の減少が理由として考えられます。

全国的な分布に変化はありませんが、1990年代と2010年代とでは総個体数が6千羽ほど減少しました。(植田・植村, 2021)。その要因として、ヒトの生活変化によるものが大きいとされています。身近だった里山の自然が宅地化などで減り、農業の衰退により畑や水田が減少し、エサとなる昆虫が少なくなっていることが考えられます。エサの減少は、個体の生存率だけではなく子育ての成功率にも影響します。

本種は人家の軒先などに、唾液を混ぜた泥を壁面に付けて巣を作りますが、最近の家屋では軒のないものや、壁面が加工されて巣が作りにくいものも多く見られるようになりました。一部では、ヒナが落とす糞を嫌がってツバメが入れないように玄関に網を張ったり、なかには巣を壊したりする事例も報告されています。このような状況から生息数の減少が起きているのでしょう。このままではスズメと同様に保護が必要となる日が来るかもしれません。

ヒトとの軋轢 カラス2種

日本にはハシブトガラス(図1F; 以下、ハシブトと表記)とハシボソガラス(図1G; 以下、ハシボソと表記)が留鳥として生息しています。いずれも外見が黒一色のため同種だと思われがちですが、鳴き声やくちばしの形状が異なり、ハシブトの方が体が大きめです。生息環境等も異なり、ハシブトが北海道から沖縄県にかけての島嶼部も含めた森林や海岸、市街地に生息するのにに対し、ハシボソは北海道から九州にかけての農耕地等のひらけた場所を好み、島嶼部では見られま

せん。ハシブトは島でも見られる森や都会のトリ、ハシボソは島にはいない農耕地のトリと言ってもよいでしょう。

ただ、近年は農耕地で、ハシブトを見かける機会が増えました。おそらく、畑や水田などが耕作放棄された結果、荒地になり、ひらけた環境を好むハシボソが減少、代わってハシブトが入りこんできたのでしょう。

このように、種ごとのすみわけは見られるものの、一般的にカラスは森林等の自然度が高い環境だけではなく、人家周辺や農耕地でも見られるわけですが、なぜか身近だと感じられていません。これにはヒトの生活へのかかわりが大きく影響していると考えられます。

例えば、多くのヒトが暮らす都会では、ごみ置き場を荒らす、ねぐら近くでは鳴き声がうるさい、といった生活面での被害が報告されています。さらに、カラスは農作物に被害する代表的なトリとされています。果樹や野菜の食害に加え、植えたばかりの苗を引き抜くなどの“いたずら”とも思える行為、ビニールハウスの被覆ひふくをつついて穴を開ける、畜産飼料の盗食といった被害が発生している地域もあります。様々な環境においてヒトとの軋轢あつれきを生むことから、厄介者で身近にいてほしくないと考えられるようになり、結果として身近だと認識されていないのかもしれない。

身近かどうかはヒト次第 カワラバト

カワラバトはドバトとも呼ばれ、伊豆諸島と小笠原群島を除く全国に留鳥として分布し、一年を通して繁殖も確認されています。平地から丘陵地にかけての農村部から都市部に生息し、特に駅や公園で見かける機会の多いトリです。当館の前庭にも飛来し、カスケードで水浴びをしたり、日光浴をしたりしている光景を頻繁に見かけます。人家や観光施設が集まっている地域を除き、森林環境での観察事例はほとんどありません。

本種が身近だと感じられていない理由として、どこでも普通に見られること、あるいは外来種であることが関係していると考えられます。「身近なトリ」をイメージした時に、多くのヒトは「在来ざいらいのトリ」を思い浮かべるでしょう。バードウォッチャーのなか

には外来種を観察しても記録として残さない人もいます。

全国的な生息数の減少により、観察機会が減っている可能性も考えられます。全国的な分布に変化はありませんが、1990年代と2010年代とでは、総個体数が6,031羽から2,539羽と大きく減少しました。餌付けをするヒトが減り、大きな群れにならなくなったことが原因の一つとして考えられています(植田・植村, 2021)。

しかし、目録では本県での減少傾向は見られず、個体数はほぼ横ばい状態だと思われます。そのため、観察機会の減少というよりも、ごく普通に生息しているために意識されていない、あるいは外来種であるがゆえに身近だと感じられていないことのほうが、要因として大きいと思われる。

身近なトリに目を向けて

ちょっとした環境の変化に敏感に反応するトリは、「環境のモノサシ」と言われることがあります。水辺環境を好むアオサギ、森林環境にくらすメジロやシジュウカラ、都市環境で見られるハシブトガラスやカワラバト、あなたはどのトリを身近だと感じたでしょうか？ そのトリは、あなたが暮らす身近な環境や、子どもの頃から慣れ親しんできた環境を反映しているかもしれません。あるいは、理想だと感じている環境にくらすものを無意識に思い浮かべているのかもしれません。

2024年2月から、動物たちの生態をテーマにした企画展を開催します。動物画家である藪内正幸氏により描かれた生態画を通して、身近なトリを含めた動物たちのくらしぶりはく製と共に紹介する予定です。ヒトと共にくらす多様なトリとその生態や生息環境に目を向けるきっかけとなってほしいと思います。

参考文献

- 日本野鳥の会神奈川支部編, 2020. 神奈川の鳥 2011-15: 神奈川県鳥類目録 VII. 685 pp. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜
- 植田睦之・植村慎吾, 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年. 184 pp. 鳥類繁殖分布調査会, 東京.

ミュージズ・フェスタ2023で開催した公開フォーラム報告

おおしま みつはる
大島 光春(学芸員)

2023年3月11日、4年ぶりに再開したミュージズ・フェスタの中で、公開フォーラム「生命の星・地球博物館の新たな一歩を考える～みんなでつくる博物館・インクルーシブデザインの視点から～」を開催したので報告します。

なぜ今インクルーシブ公開フォーラムを開催するのか？

2022年にICOM(国際博物館会議)で新しい博物館の定義が採択されました。私はその定義に使われた“inclusive”は重要なキーワードだと感じました。しかし、インクルーシブという単語は知っていても、博物館においてどういうことを指すのか、ユニバーサルとどこが違うのかがはっきりとはわかりません。博物館業界では、きっと私と同じようにモヤモヤしている人が多いに違いないと考え、この公開フォーラムを企画しました(表1)。

紙上追体験はムリ！

たった2時間のフォーラムでした。しかし、2ページで紹介して、フォーラムの内容を読者に理解していただくのはとても難しいので、エッセンスをギュッと凝縮してお届けすることにします。

□塩瀬准教授「なぜ今、博物館にインクルーシブデザインが求められるのか？」

インクルーシブ(inclusive)という(英)単語はわかりにくいという声を聴きますが、日本語に訳して「包摂ほうせつ」としても、全然わかりやすくなりません。インクルーシブはそのまま受け入れることにして、逆の意味の排除(exclusive)をしないこと、というふうにと考えるとわかりやすいとのこと。「使わない人」「使えない人」「使おうと思わない人」に実際に製品やサービスを使ってもらい、観察や対話を繰り返すことによって、それらがうまく使えない理由を突き止め、課題解決に向けて行動するというのが、インクルーシブデザインの手法です。

目の見えない人と一緒に絵画(例はモナリザ)を鑑賞し、見えない人に絵の詳細な説明を試みると、普段自分が見えているはずなのに見過ごしている点が

多いことに気づくことがあります。見えない人に教えているつもりが、むしろ教えた人にとっても学びになることに気づきます。つまり、インクルーシブデザインでは、一方的にしてあげるというのではなく、みんなで話し合うことによって互いに学び、ともに発見することこそ価値があります。

博物館をはじめとする公共施設は、地域外から人が訪れる場所です。その来訪者を迎える最前線の場所がインクルーシブデザインを取り入れていると、来訪者は温かく迎えられたと感じます。だから、博物館は地域の最前線として誰も排除しない場でなくてはならないのです。「ために」ではなく「ともに」という、一人ひとりが当事者として参加する姿勢が大切です。

□佐藤学芸員「生命の星・地球博物館におけるこれまでの取り組み」

神奈川県立博物館が1967年に開館し、28年後の1995年に自然系が分離独立して神奈川県立生命の星・地球博物館が開館しました。「柵がない」ため「標本に手が届いてしまう」展示の結果として「触れる展示さわ」が実現しました。そのことが視覚障がい者の間で話題になり、そうした方々のリクエストにこたえる形で対応することになりました。分身ロボット「OriHime」やアバターロボット「newme」の実験を行ったものの、人的資源・予算・設備などの問題を解決できず、すべて実証実験段階に留まっています。現在は特別支援学校や院内学級へのリモート遠足など、医療的ケア児・者への対応にも取り組み始めています。

改正博物館法にも明示された学校教育・福祉・利用者や地域などと連携するソーシャルインクルージョンへの新しい取り組みをしなければならない反面、博物館の根幹的な業務(資料収集・調査研究・教育普及)はおろそかにできません。新しい取り組みを始めようとしたら、それに見合うだけの人・資金・場所・時間・ノウハウ・連携先が必要です。まもなく28年目を迎える当博物館はこれら

表1. 当日のプログラム

| | |
|-------|---|
| 13:30 | 館長挨拶 平田大二 |
| 13:35 | 趣旨説明 大島光春(学芸員) |
| 13:40 | 「なぜ今、博物館にインクルーシブデザインが求められるのか？」 塩瀬准教授(京都大学総合博物館 准教授) |
| 14:00 | 「当館におけるこれまでの取り組み」 佐藤武宏(企画普及課長・学芸員) |
| 14:10 | 「盲学校出前授業の取組からの学び」 田口公則(学芸員) |
| | (休憩) |
| 14:40 | 「多様な人と共につくる博物館事例～生命の星・地球博物館ワークショップ事例報告～」 山田小百合氏(NPO法人Collable代表理事) |
| 15:00 | 対談 これからの「生命の星・地球博物館」の30年を考える 登壇者 塩瀬准教授・山田小百合氏 佐藤武宏・田口公則・大島光春 |
| 15:30 | 閉会のことば 大島光春 |

の解決に向かいつつ、インクルーシブに関する次のステップを考える時期にあります。

□田口学芸員「盲学校出前授業の取り組みからの学び」

対話と共感を基に生徒に寄り添うことが、子どもたちの主体的な学びを促すヒントになると考えています。盲学校の生徒の「触る観察」はモノの認識です。このプロセスを効果的に行うには、時間をかけて部分から全体へ理解を広げていくこと、言葉での説明と触覚を組み合わせてイメージを紡ぐことなどが重要です。また、参加者の様子を観察しながら、対話を重視して進めるには、少人数の方が呼応しやすいため、生徒は4人までが適当です。

このアプローチは、博物館での講座にも応用しており、たとえば、貝殻を触って形を把握する活動では、参加者との対話と共感が重要な要素となっています。

□山田代表「多様な人と共につくる博物館事例 生命の星・地球博物館インクルーシブワークショップ事例報告」

公開フォーラムに先立ち、2月19日に開催されたインクルーシブワークショップ(以下、WS)では、「インクルーシブデザインで博物館の魅力(再)発見する」ことを目的としました。初めて展示室を

見学したときに「3階から大きな1階展示室を俯瞰できることが大きな特徴だ」と感じました。WSでは、ここを含めて4つの展示(エントランス、アンモナイトの壁、大きな板根、3階から1階展示室を見下ろせる場所)を設定し、それらのうち3か所を選び、視覚障がいのあるリードユーザとともに展示室をめぐり、対話型の鑑賞を行いました。教室に戻ってから特に印象に残った1か所を選び、言葉でその展示のイメージが浮かぶような紹介文を作成し、各グループの紹介文を朗読して、共有しました(図1)。一連の活動で見られた全体的な特徴として、山田さんは次の3つをあげました。①一番触れない3階からの景色の言語化が人気! ②学芸員さん展示室ではようしゃべるのにグループ活動では逆に言葉がつまりがち、③同じ場所を見ても生まれる言葉は別々。

筆者にとっては「障がい者対応が中心にはなっているけれども、それだけがソーシャルインクルージョンの活動ではなく、あるテーマからエクスクルージョンされてしまう人をリードユーザに迎えてプロジェクトを作っていくもの」ということを実体験し理解できたWSでした。



図1. 公開フォーラムに先立って開催したインクルーシブWSの様子。

□対談:「インクルーシブデザインの視点から、これからの30年を考えてみる」(図2)
※紙面の都合で対談の内容から特に重要な言葉だけ抜き出しました。

塩瀬: 世界から来てほしいと言っているのに、ある人には来なくてよいよというムラハチーブ(村八分)な博物館・美術館でいいんですか? 「うちのまちには来なくていいよ」ということなら別ですが、そうでないなら来訪者にとっての最前線の博物館は、「インクルーシブミュージアムにしていきましょう」ということです。



図2. プログラムの最後に行われた対談の様子。各講演をもとに掘り下げることができました。

山田: 徳島県博の例で印象的だったことは「学芸員さんがすごく変わった」ことです。集中してWSを行ったので、学芸員さんの中で気づき、意識の変化があったのだと思います。

田口: 目の見えない人にとって空間の把握は難しい。例えば、木々からなる山の場合、杉しか知らなければ山が杉山になってしまう。しかしWSではリードユーザの応答が良く、十分に空間を共有できたと感じました。

佐藤: 対話するといっても、言葉で表現することができない人や、そもそも興味がない人もいますよね。

塩瀬: しゃべる、紙に言語化する、絵で描く、など人によって得意な表現が違うので、WSではいろいろなアウトプットの仕方をすべて入れておくようデザインしています。対話の時間と種類をたくさん持つのが大事。そうでないとよく知っている人と声のかい人、偉そうな人に話が引張られてしまう。小さな声でも本当に大事なことをみんなで見つける、というのがみんなのまちの作り方。

アンケートから

公開フォーラム終了時、参加者の方々に紙とオンラインでアンケートをお願い

しました。回答数は合計33件。男性61%、女性36%、無回答3%。年齢は50代34%、60代18%、20代15%、40代と70代が12%。職業は展関連事業者28%、博物館関係者24%、学生12%、その他15%。参加の目的は複数回答で「インクルーシブデザインについて知りたかったから」と「インクルーシブデザインに関する「生命の星の取り組み」について知りたかったから」が21%、「自分の所属する団体や館でもインクルーシブデザインを取り組みたいと思っているから」が14%、「インクルーシブデザインの取り組みに対して自分ができることを考えたかったから」が12%(図3)。また、満足度では「非常に良かった」33%、「良かった」52%でしたが、オンライン参加の方の半分の方からコメント欄に「音が聞き取りにくかった」あるいは「聞き取りにくかったので、良かったに下げました」とありました。「非常に良かった」理由としては、「整理できた」「意味がわかった」「取り組みの事例を知ることができた」「考えが深まった」「社会として当たり前にあるべきだとわかった」などのコメントがありました。多くの参加者の理解を深めることができたようです。おかげさまで、企画意図、目的は達成できたと感じています。

おわりに

当館はこの公開フォーラムをきっかけに、インクルーシブミュージアムへの取り組みを始めたわけですが、対話の継続ができないと始めた意味がありませんし、成果も期待できません。他の博物館や地域など、多くの方々を巻き込んで、続けていきます。一緒にインクルーシブミュージアムへの道を歩みましょう!

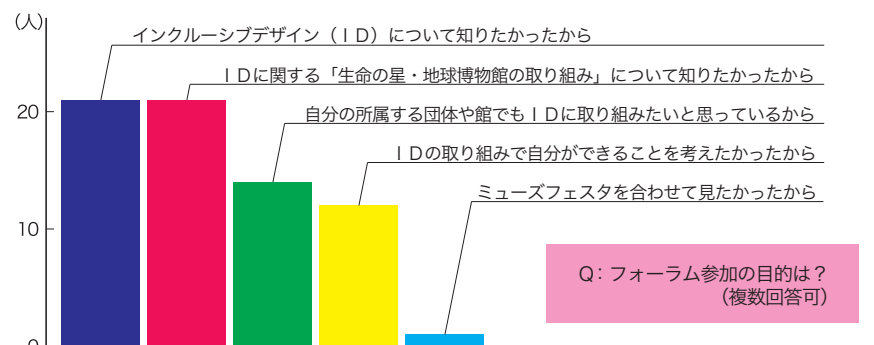


図3. アンケート結果の一部(問2).

神奈川県鳥瞰図に描かれた小田原・箱根地域 — 酒匂川流域にある謎の「名物」 —

にいだしゅういち
新井田 秀一(学芸員)



図1. 神奈川県鳥瞰図(神奈川県立歴史博物館所蔵, 富士フィルムビジネスイノベーション株式会社画像提供).

はじめに

神奈川県立生命の星・地球博物館 令和4(2022)年度 特別展「みどころ 沢山! かながわの大地」にて展示した吉田初三郎作「神奈川県鳥瞰図」から、小田原・箱根地域について紹介します。

このような鳥瞰図は、観光名所を読み解くことが面白いのですが、今回はそれだけではなく、描かれている地形についても一緒に見ていきましょう。

「神奈川県鳥瞰図」とは

この絵図(図1)は、鳥瞰図絵師の吉田初三郎が昭和7(1932)年に描いたもので、原画が神奈川県立歴史博物館に収蔵されています。歴史博物館の特別展「地図最前線」において展示されました。

神奈川県観光連合会の委嘱によって外国人観光客誘致のための宣伝材料として作られたものです(武田, 2019)。関東大震災から復興を遂げた神奈川県の姿として、県内の主要な名所旧跡が描かれた観光案内図となっています。このような吉田初三郎の描く鳥瞰図は、地域の姿を伝えるメディアとして関心が高まっています(昭文社編, 2021)。

描かれた小田原・箱根地域

絵図から小田原・箱根地域を拡大したものを図2に示します。描かれている地物について、凡例はオリジナルになかったため、読み取った結果から判断しました。これを図3に示します。鉄道・道路・バス路線・航路といった交通機関

は線の色で区別し、乗り物のイラストを併記しています。なお、「省線」とは、現在のJR線のことで、当時は鉄道省が運営していたことによります。名所旧跡や駅名・地名などの名称は、短冊型プレート^{しょうせん}の形によって種類分けし、地色でレベル分けしています。

地形を見ていきましょう。図の右側に大磯丘陵から足柄平野、左側には大きく箱根火山が描かれています。

足柄平野は、中央を流れる酒匂川^{さかわがわ}を中心に、支流として関本の方から流れる狩川^{かりがわ}と松田付近で合流する川音川^{かみかみ}、洒水^{しやすい}の滝から流れる滝沢川が描かれています。

鉄道と地形の関係を御殿場線で紹介します。国府津駅～下曾我駅～松田駅



図2. 小田原・箱根地域の拡大(神奈川県鳥瞰図).

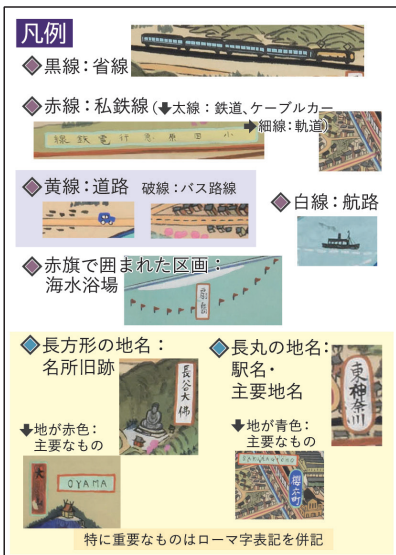


図3. 神奈川県鳥瞰図の凡例.

の区間は、大磯丘陵の緑の平らな所にあります。ここはちょうど、国府津—松田断層帯の縁になっていて、切り立ったような直線的な地形が特徴的です。小田原急行鉄道(現:小田急小田原線)は、大磯丘陵と丹沢山地の間にある川音川に沿った狭い所から松田駅(小田急線としては新松田駅)付近で足柄平野に出て酒匂川を渡り、小田原駅方面に進んでいます。大雄山鉄道(現:伊豆箱根鉄道大雄山線)の関本駅(現:大雄山駅)の右側には小高い丘状の地形がありますが、これは関本丘陵と呼ばれています。

箱根周辺を見てみましょう。箱根の最大の特徴であるカルデラ地形が、表現されています。外側を囲む明神ヶ岳・明星ヶ岳・金時山などの外輪山の中に、堰き止め湖である芦ノ湖が背後に、神山・駒ヶ岳などの中央火口丘が前側に描かれています。芦ノ湖から流れ出す早川は、中央火口丘を迂回して、仙石原から強羅・小涌谷・宮ノ下・堂ヶ島の下を



図4. 神奈川県鳥瞰図から谷峨周辺拡大.

通り、湯本で須雲川と合流します。早川が削った深い渓谷は、出山鉄橋などの橋梁でも表現されていますが、特に堂ヶ島や小涌谷周辺では、河原にある巨石も描かれています。それに比べ、須雲川の表現は控えめになっています。

もうひとつ、箱根の特徴である温泉は、その源泉周辺に白い湯煙を描くことで示しています。地名の表示された温泉地だけでなく、大涌谷や早雲山などにも湯煙がありますが、山体崩壊の地形も描かれています。

塔之沢・湯本周辺では、早川に架かる旭橋・千歳橋や函嶺洞門など関東大震災以降の土木建築や、塔ノ沢水力発電所など地形を生かした電力資源開発も描かれています。

小田原駅周辺では、丘陵地形の上に築かれた小田原城の縄張り・堀がよく分かります。また、丘陵の縁に小田原駅があり、東海道線がトンネルや築堤によって熱海方向に延伸されていることも分かります。ただし、丹那トンネルの開通は昭和9(1934)年なので、多少未来のことを描いていることになります。その割には、箱根登山線や大雄山鉄道については正確に描いています。昭和10(1935)年まで箱根登山線は、小田原—箱根板橋付近までは国道1号線上にありました(併用軌道区間)。大雄山鉄道は小田原駅まで乗り入れていませんでしたので、絵図でも途中で切れた表現になっています。

小田原駅近くには、楕円型の地物が名称なしで描かれています。これは競馬場ではないかと考えています。小田原競馬場は、関東大震災からの復興を目的として大正14(1925)年10月に開場し、情勢の変化により昭和5(1930)年に廃止されました。作画されたころにはまだ痕跡があったのかもしれませんが。

なぞの名物地名

小田原・箱根地域を調べていて、現在につながる地名が2つあります。一つ目は、「清水の峽嵐(読み方不明)」です(図4)。この時代には開業前のため描かれていないの



図5. 神奈川県鳥瞰図から足柄平野上端部.

ですが現在の谷峨駅近くになります。御殿場・駿河(現:駿河小山)方面からの鮎沢川が、丹沢山地からの河内川と合流する手前の山肌に記されています。鮎沢川には「清水橋」があり、合流から下流方向には「嵐」集落がありますが、それ以上の情報がありません。

二つ目は、「大口遊園地」です(図5)。JR御殿場線 山北駅から関本駅(現:伊豆箱根鉄道大雄山線・大雄山駅)へ延びる道は県道74号「小田原山北線」と考えられ、酒匂川に架かる橋は「大口橋」となります。問題の地物は、「範茂史跡公園」のある関本丘陵までの間の平野部に描かれています。近くに描かれている桃色の丸印は桜か桃の花と考えられ、花木が名物であった可能性があります。これらについて、些細なことでも構いませんので何かご存じでしたらお知らせください。

おわりに

本稿は2023年1月25日に当館友の会主催の地話懇話会での発表を元にしました。この絵図に関する研究は、神奈川県立歴史博物館の武田周一郎学芸員と共同で進めて、JSPS 科研費19K01149, 19K13451 の助成を受けて実施しています。まだまだわからないことの多い絵図ですので、引き続き調査研究していきたいと思っています。

参考文献

昭文社編, 岡田直解説 2021.『吉田初三郎 鳥瞰図集』昭文社.
武田周一郎 2019.「神奈川県鳥瞰図の作成過程と利用の実態. 神奈川県立博物館研究報告(人文科学) (46), 41-60.

催し物のご案内

特別展「かながわご当地菌類展」

2023年7月15日(土)～11月5日(日) 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日：9月4日(月)・11日(月)・12日(火)・19日(火)・25日(月)
10月2日(月)・10日(火)・11日(水)・16日(月)・23日(月)・30日(月)

きのこ、カビなどの菌類は、身近でありながら謎に満ちた存在です。本特別展では、神奈川県やその周辺から新種発表された菌類のほか、絶滅のおそれのあるレアな菌類、県内でなじみ深いきのこなど、これまでの研究成果から、かながわらしい「ご当地菌類」を多数ご紹介します。展示のラストには、「みんなで選ぼう！かながわご当地菌類投票」コーナーもありますのでお楽しみに！



《 事前申し込みの講座 》

詳細は、博物館ウェブサイトや催物案内をご覧ください。

- いろいろな羽根を観察してみよう【博物館】
日時／8月5日(土) 10:00～11:30
対象／小学1年～3年生とその保護者 6組20人
※保護者参加必須
申込締切：7月25日(火)
- 羽根の持ち主さがしに挑戦【博物館】
日時／8月5日(土) 13:30～15:30
対象／小学4年～6年生・中学生とその保護者 6組20人 ※小学生は保護者参加必須
申込締切：7月25日(火)
- あなたのパソコンで地形を見る(教員向け)【博物館】
日時／8月8日(火) 10:00～15:00
対象／教員 12人
申込締切：7月4日(火)
- クジラの「ヒゲ」を知ろう【博物館】
日時／9月2日(土) 10:00～12:00
対象／小学生とその保護者 5組20人
※保護者参加必須
申込締切：8月22日(火)
- 川と水路の生き物を調べよう【県西部】
日時／10月1日(日) 10:00～14:00 ※雨天中止
対象／小学生～成人 20人
※小学生は保護者参加必須
申込締切：9月19日(火)
- 秋の里山の植物【横浜市】
日時／10月7日(土) 10:00～15:00 ※雨天中止
対象／小学生～成人 40人
※小学生は保護者参加必須
申込締切：9月26日(火)
- 野生動物の自動撮影入門【小田原市および博物館】
日時／10月 7日(土) 13:30～16:30
10月15日(日) 9:30～12:00
※荒天中止、2日間の参加が条件です。
対象／小学4年生～成人 15人
※小学生は保護者参加必須
申込締切：9月26日(火)
- きのこの観察と同定【博物館および館周辺】
日時／10月9日(月・祝) 10:00～15:30 ※雨天中止
対象／小学生～成人 20人
※小学1年～3年生は保護者参加必須
申込締切：9月27日(水)

ライブラリー通信 書架を歩く? 移動する本の不思議

もちづき せんな 望月 千奈(司書)

ライブラリーでは閉館後、乱れた書棚を整理しています。様々な本が元居た場所を離れ、別の棚に紛れ込んでいるのですが、その中でなぜか毎回のように決まって移動している本があります。今回はそのような「歩く」本たちをいくつか皆様にご紹介します。

『ビジュアル 世界一の昆虫』(日経ナショナルジオグラフィック社)

世界最小の昆虫や最古の昆虫、一番うるさいセミ、生まれる季節で容姿の異なるチョウなど世界で唯一の特性をもつ昆虫を135種紹介しています。見開きオールカラーの大判写真が迫力のある本です。



日経ナショナル
ジオグラフィック社
2010年

『世界に誇る! 恐竜王国日本』(宝島社)

日本で発見された恐竜29種をCGイラスト付きで解説している本です。実際に発見された化石や発掘現場などの写真が豊富に掲載されています。「日本の恐竜」を主題とした本は他にも所蔵がありますが、この本は当館ライブラリーの中でもトップクラスに人気です。

『おじゃる丸カズマの石コロ博士になろう』(角川書店)

身近な石の特徴や種類を、「おじゃる丸」に登場するキャラクター達と一緒に学べる本です。石マニアのカズマが、ワンポイント知識として石の見分け方などを解説してくれています。

これらの本には鮮やかなカラー写真を多用していたり、大きなサイズであったり、目に留まりやすいという共通の特徴がありました。何度も移動する本はそれだけ多くの利用者に読まれている本です。思わず手に取りたくなるような、人を惹きつける魅力があるのでしょうか。

【追悼】青木淳一 元館長

ひらた だいじ 平田 大二(前館長)

青木淳一元館長は、2022年11月11日肺炎のためご逝去されました(享年87)。青木元館長は2000年4月に第二代館長として就任され、2006年3月に退任されました。この間、館の運営や友の会、ボランティアの活動を温かく見守っていただきました。一方で館長室に顕微鏡を置き、自らの研究を続けられていた姿が思い出されます。前職とは異なる立場で、さぞかし気苦労も多かったと思われるかもしれませんが、いつも笑顔を絶やさず、時折ダジャレを言っては和やかな雰囲気を作ってくださいました。お元気で過ごしてばかり思っていましたので、大変残念です。謹んでご冥福をお祈りいたします。



最新の情報は、当館ウェブサイト、および公式Twitterでご確認ください。

[公式ウェブサイト]

<https://nh.kanagawa-museum.jp/>

[公式Twitter] @seimeinohoshiPR

[混雑情報Twitter] @seimeinohoshiCI

[問合せ先]企画情報部 企画普及課

TEL: 0465-21-1515

自然科学のとびら

第29巻2号(通巻111号)

2023年6月25日発行

発行者 神奈川県立生命の星・地球博物館

館長 田中 徳久

〒250-0031 神奈川県小田原市入生田499

TEL: 0465-21-1515 FAX: 0465-23-8846

編集 本杉 弥生(企画普及課)

印刷 株式会社あしがら印刷

© 2023 by the Kanagawa Prefectural Museum of Natural History.